

地域高齢者における親密な他者の有無とその関連要因

矢庭 さゆり*・矢嶋 裕樹

新見公立大学看護学部

(2013年11月13日受理)

本研究の目的は、地域高齢者における親密な他者の有無とその関連要因を明らかにすることである。分析対象者572名のうち、親密な他者が「いる」と回答した者は478名（88.7%）であった。ロジスティック回帰分析の結果、親密な他者の有無と有意な関連を示した変数は、性別（Odds Ratio：OR = 2.29, 95%Confidence Interval：CI = 1.25-4.21）、年齢（OR = 1.94, 95%CI = 1.03-3.68）、生活機能（OR = 13.3, 95%CI = 3.98-44.4）、教育歴（OR = 2.38, 95% CI = 1.31-4.30）、社会活動（OR = 5.05, 95%CI = 2.00-12.76）であった。すなわち、女性、年齢が高い（後期高齢者）、教育歴が高い（義務教育修了以上）、生活機能が高い、社会活動に従事している者ほどが親密な他者をもつ傾向にあった。今後は、親密な他者の有無が高齢者の心身の健康や心理的安寧に及ぼす影響を検討していく必要性がある。

（キーワード）地域高齢者、親密な他者

I. 緒言

我が国における高齢者の社会関係（Social relationship）に関する研究動向を概観すると、家族・親族関係、老親と子どもとの同・別居に関する研究から社会関係の機能面に着目した研究が進められている¹⁻⁵⁾。しかし、この社会関係の核となる「親しい関係」については、比較的早い段階から関心が持たれていたものの、その構成面に関する実証的知見の蓄積はいまだ少ない⁶⁾。

Rook は、「親しい関係」の構成要素として、「相談・問題解決的な関係」に加えて、他者と情緒的なつながりを持ち、くつろぎや楽しみを共有できる関係であるコンパニオンシップの存在をあげ、コンパニオンシップが生活の質に寄与することを明らかにしている⁷⁾。

社会的ネットワークの規模が縮小しやすい老年期においては、情緒的なつながりのある親密な他者をもつことが心身の健康や心理的安寧を維持・向上するうえで重要な役割を果たすと考えられる。

そこで今回、今後の高齢者の心身の健康や QOL を高めていくための支援の一助として、高齢者にとっての親密な他者の存在に着目をした。本研究は、その第1段階として、地域の高齢者を対象に親密な他者の有無とその関連要因を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査地域の概略と調査対象

調査地域とした B 市は、中国地方 A 県南西部に位置し、2009 年 12 月末現在人口 67,834 人、高齢化率が 22.4% の小都市である。市内は市中心部である中央部を基点に、東西北の 4 つの行政区に分けられている。要介護（支援）認定者は 2000 年以降毎年増加傾向にあり、調査時点の認定率は 17.5% である。

調査対象は、B 市に住民票を有する高齢者 15,162 人（2009 年 12 月末現在）のうち、行政区分ごとの高齢者人口割合によりそれぞれ比例抽出した高齢者 705 人とした。

2. 調査方法

調査の実施にあたっては、B 市高齢者支援課および介護支援専門員協会支部、居宅介護支援事業所に文書と口頭により協力依頼をした。B 市の協力を得て、市内 4 地区 10 か所で開催される小地域ケア会議に出向き、対象者への調査依頼文書の配布を依頼した。同意を得られた者に調査依頼文書・無記名自記式調査票と返信封筒を配布し、記入済み調査票は回答者本人が個別返信用封筒に入れて投函するよう依頼した。調査時期は 2010 年 1 月～3 月末の約 3 ヶ月間であった。

3. 調査内容

本研究に用いた調査内容は、対象者の基本的属性（性・年齢）、世帯構成、居住年数、治療中疾患の有無、生活機能（老研式活動能力指標）、職業歴、教育歴、経済的ゆと

*連絡先：矢庭さゆり 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

り感、外出頻度、社会活動、親密な他者（気心が知れた仲）の有無とした。

- 1) 生活機能は、老研式活動能力指標を用いた⁸⁾。指標は「手段的自立」「知的能動性」「社会的役割」の3つの活動能力を測定する13項目からなる。各項目に対する回答は「はい」「いいえ」の2件法で求め、得点化の際には「はい」という回答に1点、「いいえ」という回答に0点を与え、単純に加算して合計得点を算出した。したがって、得点が高いほど、生活機能が高いことを意味している。
- 2) 社会活動については、地域の総代、老人クラブの役職、趣味の会等の世話役、民生委員等公的役割、社会福祉協議会の活動、神社・寺総代、シルバー人材センター活動（登録）、ボランティア活動など地域活動への参加について、それぞれの活動参加の有無をたずねた。
- 3) 親密な他者（気心が知れた仲）については、「あなたとお付き合いのある人のなかで、気心の知れた仲の人はいますか」について2件法で回答を求めた。
- 4) 経済的ゆとり感は、「まったくゆとりがない」から「かなりゆとりがある」までの4件法、自覚的健康（度）も同様に「よくない」から「とてもよい」までの4件法で回答を求めた。
- 5) 外出頻度は、「ほとんど外出しない」から「毎日外出する」までの4件法で回答を求めた。

4. 倫理的配慮

調査票に研究の趣旨、研究協力中断の保証、匿名性の確保、研究者の守秘義務、研究以外の目的に使用しないことを明記し、自由意思での回答を依頼するよう徹底した。調査後は個別封筒で郵送にて回収し、調査票の返信をもって調査同意が得られたものとした。なお、本研究は岡山県立大学倫理委員会の承認を得て実施された（2009年9月25日倫理委員会審査承認）。

5. 分析方法

性別および年齢区分（前期/後期高齢者）の属性と親密な他者の有無との関連は、クロス集計および χ^2 検定をおこなった。親密な他者の有無とその関連要因の分析には、ロジスティック回帰分析を用い、目的変数は親密な他者の有無、説明変数は教育歴、職業歴、経済的ゆとり、疾患の有無、生活機能（12点以下:低い、13点満点:高い）、

表1 対象の基本的属性等の分布 n=539

		n	(%)
性別	男性	209	(38.8)
	女性	330	(61.2)
年齢	平均±標準偏差	75.8±7.5歳	
	前期高齢者	253	(46.9)
	後期高齢者	286	(53.1)
世帯構成	独居	68	(12.6)
	それ以外	471	(87.4)
教育歴	義務教育未満	120	(22.3)
	義務教育以上	419	(77.7)
居住年数	10年未満	20	(3.7)
	10年以上	519	(96.3)
職業歴	勤めの仕事	282	(52.3)
	自営業	112	(20.8)
	主婦・無職	145	(26.9)
自覚的健康	健康でない	260	(48.2)
	健康である	279	(51.8)
治療疾患数	なし	116	(21.5)
	1疾患以上	423	(78.5)
経済的ゆとり	なし	230	(42.7)
	あり	309	(57.3)
社会活動	していない	329	(61.1)
	している	210	(38.9)
外出頻度	週1回未満	185	(34.3)
	週1回以上	354	(65.7)

外出頻度、社会活動、調整変数は性、年齢、居住年数とした。

データの集計及び解析には、統計解析パッケージSPSS 16.0 J for Windowsを使用した。検定の際の有意水準は5%とした。

III. 研究結果

1. 記述統計

回収数572部（回収率81.1%）であった。このうち、分析に用いるすべての変数に欠損値のない539名のデータを分析に使用した。対象者の基本的属性の分布は表1に示すとおりであった。

男性209名（38.8%）、女性330名（61.2%）であった。平均年齢は75.8±7.5歳、前期高齢者253名（46.9%）、後期高齢者286名（53.1%）であった。居住年数は10年以上の者が519名（96.3%）であった。治療疾患を1つ以上持っている者は423名（78.5%）、健康であると答えた者は279名（51.8%）であった。また、外出頻度は週1回未満と答えた者が185名（34.3%）であった。親密な他者が「いる」と回答した者は全体の478名（88.7%）であった。

2. 性・年齢区分と親密な他者との有無との関連

親密な他者の有無と各属性等との関連は表2に示した。

表2 性・年齢区分と親密な他者の有無

		親密な他者がいる	%	親密な他者がいない	%	p
性別	男性	178	85.2	31	14.8	0.029
	女性	300	90.9	30	9.1	
年齢	前期高齢者	227	89.7	26	10.3	0.281
	後期高齢者	251	87.8	35	12.2	

* χ^2 乗検定

親密な他者の有無と性別には有意な差がみられ、女性において親密な他者がいると回答した者が有意に多かった。前期高齢者、後期高齢者の年齢区分と親密な他者の有無とのあいだに有意な関連はみられなかった。

3. 親密な他者の有無に関連する要因

ロジスティック回帰分析の結果、親密な他者の有無と有意な関連を示した変数は、性別（OR＝2.29, 95%CI＝1.25-4.21）、年齢（OR＝1.94, 95%CI＝1.03-3.68）、生活機能（OR＝13.3, 95%CI＝3.98-44.4）、教育歴（OR＝2.38, 95%CI＝1.31-4.30）、社会活動（OR＝5.05, 95%CI＝2.00-12.76）であった（表3）。すなわち、女性、年齢が高い（後期高齢者）、教育歴が高い（義務教育修了以上）、生活機能が高い、社会活動に従事している者ほどが親密な他者をもつ傾向にあった。

表3 親密な他者の有無に関連する要因

	OR	95% CI		有意確率
		下限	上限	
性別(0=男性/1=女性)	2.296	1.250	4.218	.007
年齢(0=前期高齢者/1=後期高齢者)	1.948	1.030	3.685	.040
生活機能(0=低い/1=高い)	13.306	3.984	44.446	.000
社会活動(0=無/1=有)	2.380	1.315	4.307	.004
学歴(0=義務教育/1=それ以上)	5.053	2.001	12.760	.001
定数	19.917			.000
OR:オッズ比、CI:信頼区間 目的変数:親密な他者の有無				

IV 考察

本調査対象者は、後期高齢者が多く、長くこの地に住み続けながら年を重ねてきた者が多い傾向にある。また、比較的教育歴も高く、過去の職業歴では勤め仕事をしてきた経緯があり、経済的ゆとりがあると回答した者も多い。そのような特徴を踏まえた上で考察をすすめる。

1. 高齢者における親密な他者

本研究の結果、親密な他者を有している者は、男性より女性が有意に多かった。このことは、他の研究結果と同様である。一般的に、女性は家族や地域を中核とした人間関係のネットワークの中で、女性としての役割期待に応えることを通してアイデンティティを獲得するため⁹⁻¹¹⁾、このことが今回の結果にも影響している可能性がある。つまり、女性は老年期以前から他者と交流を持ち¹¹⁾、性役割期待に応えながら自己を支え、そのことが友人や地域との親密な関係を築き上げることにつながっていることが考えられる。

一方、男性においても親密な他者の存在を8割が認識していた。本調査対象者の男性の特徴は、勤め仕事の経験がある人が約半数であり、週1回以上外出している人

が6割、社会活動をしている人は3割である。地域での何らかの活動や他者との接点を有している人が多い。橋本は、老年期において友人関係を維持し、社会活動を続けることは、社会的に相互の関係性を強めることになり、自分自身の居場所を見つけることにつながると述べている¹²⁾。老年期において、このような情緒的なつながりを持つ親密な他者との関わりを持ち続けることは、心身の健康や心理的安寧を維持・向上するうえで重要な役割を果たすと考えられる。

2. 親密な他者の有無との関連

本研究において、女性、年齢が高い（後期高齢者）、教育歴が高い（義務教育修了以上）、生活機能が高い、社会活動に従事している者ほど、親密な他者をもつ傾向にあることが明らかとなった。最も強い関連を示したのは生活機能である。親密な他者との交流を継続していくためにも、身体機能を中心とした生活機能を維持しておくことが必要となるのはいうまでもない。健康状態を維持するとともに、身体機能がたとえ低下し、バスや電車を使つての外出がままならなくなったとしても、自身で電話がかけられたり、手紙を書くなど、手段を変えて交流が保てることが重要となる。

次に強く関連を示したものは、学歴・教育歴である。一般的に教育年数が長いほど多くの友人や関係者との交流があることが知られており、本研究においてもその影響が反映された可能性がある。女性および社会活動については、先述同様に男性に比べて女性の方が親密な他者をもちやすい傾向にある。さらに本研究においては年齢が高い方がより親密な他者をもちやすい傾向も示されている。

今回は、地域高齢者を対象として親密な他者の有無とその関連要因を明らかにすることを目的とて調査を行なっている。したがって、重要な他者の存在の有無を把握することにとどめており、それが誰で、どの程度の親密さかについては把握していない。この点については今後の研究課題としていきたい。また、老年期においては、自ら選択し残された重要な他者との間で情緒的な交流が増大していくといわれている（社会情緒的選択理論）¹³⁾。この理論をもとに地域の高齢者を対象として、その実際について実証的に研究を深めていきたい。さらに今後は、親密な他者の有無が実際に高齢者の心身の健康や心理的安寧に及ぼす影響を検討していく必要性がある。

最後に、本研究の限界と課題について述べる。まず、今回の調査は一地域の調査であること、小地域ケア会議など地域づくりの視点から高齢者福祉に力を入れている地域であったことから、地域特性を反映した結果が導かれた可能性がある。したがって、一般化には限界がある。今後は地域特性の異なる対象においても親密な他者の有

無とその関連要因について明らかにしていく必要がある。

謝辞

本研究の実施にあたり、趣旨を承諾し快くご協力くださいました地域住民の皆様、調査にご協力くださいましたB市介護保険課および地域包括支援センターの職員の皆様に心より感謝いたします。

文献

- 1) 野口裕二: 老年期の社会関係. 老年学入門, 川島書店, 185-194, 1993.
- 2) 横山博子, 古谷野亘: 老年期の家族に関する研究: 80年代の動向と今後の展望. 家族関係学, 73-79, 1993.
- 3) 平野順子: 都市居住高齢者のソーシャルサポート授受: 家族類型別モラルへの影響. 家族社会学研究, 10, 95-110, 1998.
- 4) 藤崎宏子: 現代家族問題シリーズ高齢者・家族・社会的ネットワーク, 培風館, 6, 1998.
- 5) 金恵京, 杉澤秀博, 岡林秀樹他: 高齢者のソーシャルサポートと生活満足感に関する縦断研究. 日本公衆衛生雑誌, 46, 532-541, 1999.
- 6) 西村昌記, 石橋智昭, 山田ゆかり, 古谷野亘: 高齢期における親しい関係「交遊」「相談」「信頼」の対象としての他者の選択. 老年社会科学, 22(3), 367-374, 2000.
- 7) Rook KS: Social Support versus companionship; Effects on life stress, loneliness, and evaluations by others. Journal of Personality and Social Psychology, 52, 1132-1147, 1987.
- 8) 古谷野亘, 柴田博, 中里克治, 芳賀博他: 地域老人における活動能力の測定: 老研式活動能力指標の開発. 日本公衆衛生雑誌, 34, 109-114, 1987.

- 9) 江原由美子: 高齢社会とジェンダーロール-日本の現状と課題-. 老年精神医学雑誌, 20(5): 567-572, 2009.
- 10) 下仲順子編: 老年心理学. 培風館, 140-146, 1997.
- 11) 長嶋紀一, 佐藤清公: 老人心理学. 健帛社, 1-19, 2000.
- 12) 橋本有里子: 老年期における家族的役割, 社会的役割と精神的健康との関連性に関する研究. 関西福祉科学3大学紀要, 9, 117-130, 2005.
- 13) Carstensen LL: Social and emotional patterns in adulthood; Support for socio-emotional selectivity theory. Psychology and Aging, 7, 331-338, 1992.
- 14) 浅川達人, 古谷野亘, 安藤孝敏, 児玉好信: 高齢者の社会関係の構造と量. 老年社会科学, 21(3), 329-330, 1999.
- 15) 中村好一, 金子勇, 河村優子, 坂野達郎他: 在宅高齢者の主観的健康感と関連する因子. 日本公衛誌, 49(5), 409-415, 2002.
- 16) 鈴木征男: 中高齢者におけるソーシャルサポートの役割. life design report, 4-15, 2005.
- 17) 柴田博: 求められている高齢者像. サクセスフル・エイジング, 東京都老人総合研究所, 42-52, 1998.

Companionship and its related factors in elderly living in community

Sayuri YANIWA, Yuki YAJIMA

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

The aim of this research was to clarify the presence or absence of close acquaintances in community-dwelling elderly. Among 572 subjects analyzed, 478 (88.7%) responded “yes” when asked whether they had close acquaintances. As a result of logistic regression analysis, the variables that showed a significant association with the presence or absence of close acquaintances were: gender (Odds Ratio: OR=2.29, 95% Confidence Interval: CI=1.25-4.21), age (OR=1.94, 95% CI=1.03-3.68), life functions (OR=13.3, 95% CI=3.98-44.4), educational attainment (OR=2.38, 95% CI=1.31-4.30), and engagement in social activities (OR=5.05, 95% CI=2.00-12.76). In other words, individuals who were female, older (latter-stage elderly), highly educated (higher than compulsory education), had high life functions, and participated in social activities, tended to have close acquaintances. Further research is needed to investigate what effect the presence or absence of close acquaintances has on their physical and mental health and psychological well being.

Keywords: community-dwelling elderly, companionship